シーワールドのアニマル達

●イロワケイルカ

イロワケイルカは当館で飼育しているイルカ類の中で一番小さな種類で成長しても体長が1.6m程にしかならないイルカです。頭部・尾部・胸ビレが真黒で胸から腹部が真白という非常にきれいなコントラストを成している体色が大きな特徴ですが、生れた時は全身灰色で、成長するにつれて若い個体は黒と灰色になり、年齢が増すと灰色部分は白く変化していきます。南アメリカの南端付近のマゼラン海峡とフォークランド諸島近海の冷たい海に生活しているこのイロワケイルカの飼育は、1978年西ドイツで始まり次にアメリカと続き、その美しい姿が披露されました。

当館では、1987年3月にチリのマゼラン海峡で捕獲され、サンシャイン国際水族館で飼育されていた2頭の飼育を依頼され、2月24日よりマリンシアターでベルーガと共に飼育展示しています。

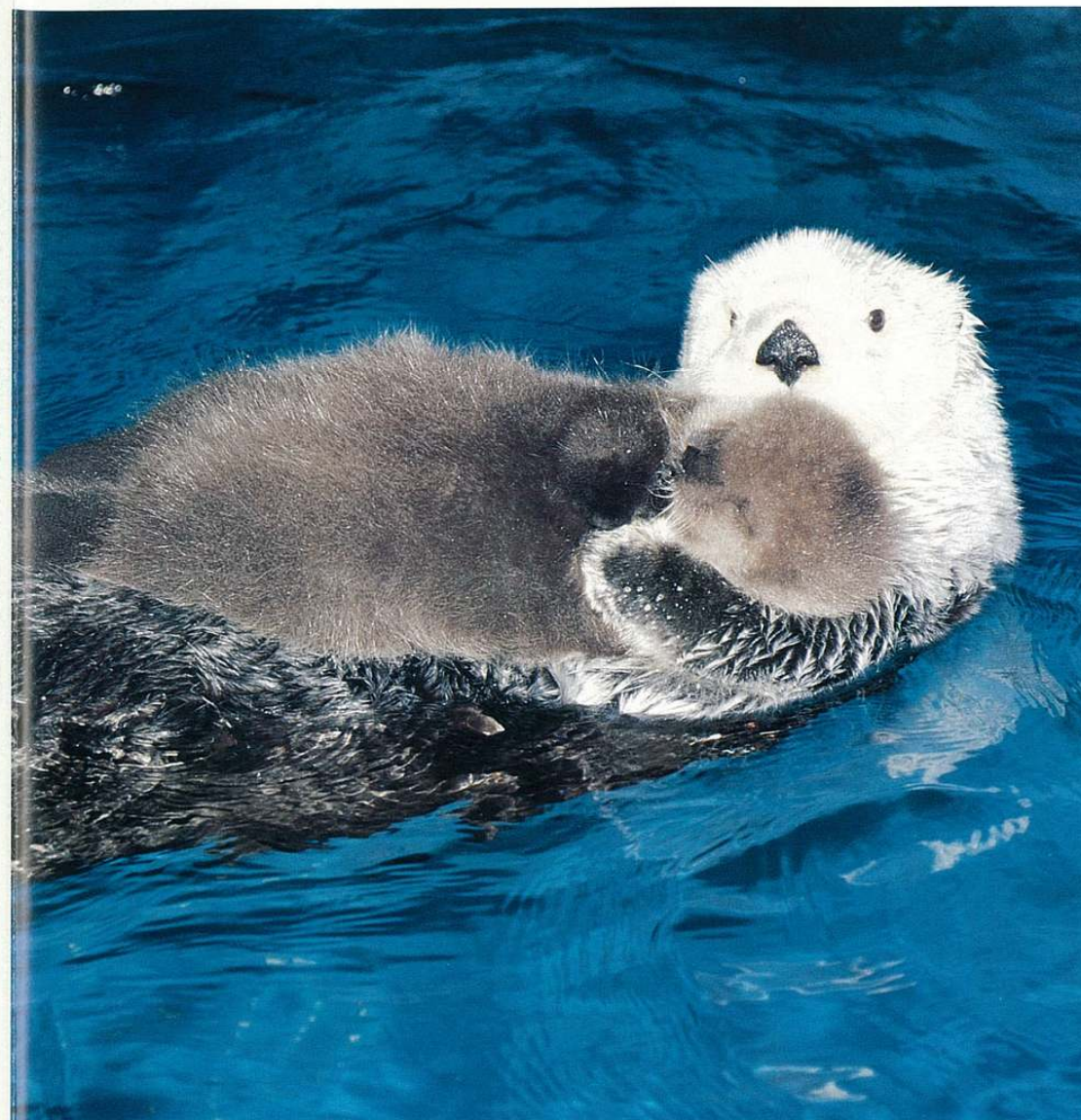
この2頭の体色は、すでに鮮やかな白と黒となっていて、プール中層から下層を泳ぐ時には腹部を上にして遊泳することが多いため、下顎から首にかけて見られる白くくり抜いたような白色部や、下腹部の円形の黒色部などの独特な模様を目のあたりにすることができます。多彩な泳ぎと共に色あざやかな白黒のツートンカラーのイロワケイルカに見とれるお客様も最近では多く見受けられます。（佐伯）

●ウナギ

ウナギの仲間は大西洋に2種、太平洋・インド洋に17種が知られ、日本にはウナギとオオウナギの2種類が生息しています。ウナギは奈良時代から食用にされていたという記録が残っているほど日本人にとってなじみの深い魚ですが、その生活史はあまり知られていません。特に繁殖に関しては、まだ解明されていない点が数多く残されています。ウナギは一生のほとんどを淡水で過ごしますが、成熟すると海に下り産卵します。産卵場所は琉球海溝付近の水深400〜500m付近と考えられていますが、なぜ生息場所から遠く離れた場所に産卵するのかはわかっていません。また、レプトセファラスと呼ばれる柳の葉のような形をしたふ化後の稚魚は、どのようなエサを食べているのかもわかっていません。このレプトセファラスは約1年で日本にたどりつき、沿岸に接近する頃には成体と同じ形をしたシラスウナギに変態し、川を上ります。鴨川でも2月頃になると市内を流れる河川でシラスウナギ漁が行われ、夜になると川岸に漁の明かりが並ぶ風景が見られます。川に上ったウナギは、小魚や貝類などを食べて成長します。

当館のウナギは、ビワコオオナマズなどと一緒にのんびりと暮らしていますが、こうして見方を変えると〝神秘の魚ウナギ〟の姿が見えてくるような気がします。（中坪）

▲イロワケイルカ *Cephalorhynchus commersonii*

▲ウナギ *Anguilla japonica*

さかまた No.41
（禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464−18
☎(04709)2−2121
発行日 平成5年7月

さかまた

鴨川シーワールド NO.41

さかなの採集から展示まで

磯採集

▲巻網を使っての採集

水族館での生物収集の方法には、自家採集、漁業者からの寄贈や購入、他園館との生物交換、動物商からの購入などがありますが、当館での飼育生物の大部分は自家採集により集められています。水族館スタッフの自らの手により飼育生物を収集する自家採集は生物の自然の姿を観察でき、展示に生かせる情報がたくさん得られる利点があります。そこで、水族館で大切な作業の1つである磯採集を紹介し、採集された生物たちがどのように展示されていくのかをお知らせしていきましょう。

磯ではさまざまな生物を採集することができますが、磯採集の対象となる生物たちは、漁業者から購入することができない種類のみに限るよう注意しています。また採集にあたっては、小さな環境変化で死んでしまう生物も少なくありませんので、動かした石などは、もとどおりの状態にもどすような心くばりをしています。

▲タイドプールの生物調査

採集場所を調べる

飼育係は日課作業となっている採集経験から、磯のどの場所にはどのような生物がいるかを知っていますが、寒い冬が終わり、水温が上がり始める春先や台風の去った後などには、磯の景観が一変し、そこに生活する生物も変化することがあります。そこで磯採集を始める前には磯の各所に潜ったり岩礁地帯を散策したりして、自分の目で生物の状況を確かめた後に展示の計画に沿って採集する生物を決めて準備にとりかかります。

採集

磯は岩肌がゴツゴツし、場所によっては海藻が繁茂していて足元がすべりやすくなっていたり、カキが密生し触れただけで切り傷ができてしまうような場所があります。また、時には潮の流れが速く、波にもまれて岩に体を打ちつけられるような事故に結びつきやすい場所もあります。そのため磯採集を行う時には、ウェットスーツに磯タビを着用し、潜水班2名、陸上監視役1名の3名ひと組で行われます。

水生植物であるアマモの群生する場所は、磯の小魚のよい隠れ場所となっているため、2人で網を静かに曳くと必ずと言ってよいほど、タカノハダイやタツノオトシゴ、ハオコゼなどが入ります。また、チョウチョウウオ類は、波のおだやかな岩礁に棲みつくので、夜になって動きの鈍いとき、2つのたも網を使って捕えます。潮だまりの岩にはりついているウメボシイソギンチャクの採集は、岩から無理に引きはなすと柔かい体を傷つけてしまうので、イソギンチャクの岩についている部分に指の爪をあて、シールの角をはがすように岩から一部はがし、あとは指のはらでなぜるようにはいでいきます。イソギンチャク採集では手の爪を伸ばしておくことが採集準備のポイントです。アオリイカのようなイカ類の採集は夜間に行います。小魚を求めて浅瀬にきたアオリイカに懐中電灯をあて、目がくらんだ瞬間、たも網で素早くすくい取り、すぐにバケツに収容します。もたもたしていると逃げるために吹き出す黒いイカスミの集中攻撃を受けてしまいます。このようにして採集された生物はトラックに設置した組み立て水槽に入れ水族館まで運び、種類ごとに選別して、展示までのしばらくの間、水槽環境に馴らすために予備水槽で飼育が開始されます。

▲岩からイソギンチャクを剥がす。

▲トラック輸送の後、種類ごとに選別する。

病気の予防と餌付け

採集された磯の魚たちは一見無傷のように見えますが、たも網や巻網などにより体表面を保護している透明な粘液がとれていて、細菌等に感染しやすくなっています。そこで搬入後しばらくは、病気の発生を予防するため毎日水槽内の掃除を充分に行った後に魚病用薬剤を飼育水に溶かし薬浴を行います。このときの注意点は、環境に慣れていない魚は人の影や水中に入ってくる掃除道具などのちょっとした変化にも驚き、水槽壁にぶつかったり、水槽外に飛び出して大きなケガをしたり、死んでしまうこともあるため、これまでの苦労を水の泡としないように、魚を驚かさないよう細心の注意をはらうことです。しばらくすると環境に慣れた魚たちへの餌付けが始められます。魚への餌付けは飼育係の腕の見せどころですが（さかまたNo.39参照）磯で採集する小魚たちは、比較的早く餌付く種類が多く、さほどの知恵や工夫を要する苦労はありません。そして餌付けを終了した魚たちは晴れて展示水槽へと移動していきますが、ここでも注意すべき点がいくつか挙げられます。

▲飼育水槽に薬剤を入れる。

展示水槽への引越し

魚の移動で最も注意しなければならないことは体表を傷つけないように水ごと移し換えることです。ビニール袋を使用すればたも網ですくい上げるよりも魚を傷つけることは少なくなります。磯の採集のように一瞬のタイミングをはかる時には使えませんが、それ以外ではできるかぎりビニール袋を使用しての移動が望まれます。また、水温の急変も絶対に避けなければなりません。飼育していた予備水槽と新居の展示水槽に水温差がある時には、ビニール袋ごと展示水槽に浮かべ水温調整をしてから放すようにします。やっとの思いで展示水槽での飼育にこぎつけた生物たちですが、これで水族館の生物になったのではなく飼育係にはまだ最後の仕事が残されています。

▲ビニール袋で展示水槽に移動する。

展示の工夫

せっかく展示した生物が岩陰に隠れてしまったり、群れを作る魚が四方八方に散らばっていては生物の生態を紹介するどころではありません。飼育係には、展示生物が本来持っている生活様式を展示水槽で再現させる努力が必要とされます。照明の光量や角度を変えたり、水流を変化させたり、時には観覧中のお客様の会話を横で聞き、お客様の知りたい素朴な疑問に答えるべく解説標示を作ったりして、水の生物をより良く、より多く理解してもらうための展示改良を重ねます。水の生物を皆さんにじっくりと観察していただき、何か一つでも新しい発見があれば、磯から水族館へとやって来き生きもの達にも満足してもらえるものと私達飼育係は思っています。　（岡田）

トピックス

ラッコの赤ちゃん誕生

▲「クララ」です。よろしくね。

平成5年1月14日、当館で初めて、ラッコの赤ちゃんが誕生しました。6年前にアラスカから搬入された時はまだ幼若だった3頭（雄1頭、雌2頭）は、その後順調に成長し、ここ1、2年繁殖行動も多く見られるようになりました。雌の「クリン」が妊娠しているのでは？と係員が気付いたのは昨年の9月頃のことでした。毎月1回行う体重測定でも体重がどんどん増加していて、係員一同2世の誕生を心待ちにしていました。そして1月14日午後3時、無事出産しました。この時間はちょうどフィーディングタイムの食事風景を大勢のお客様が見学していましたので、感動的な赤ちゃん誕生の瞬間には、お客様からも思わず大きな拍手がわき起りました。ラッコの出産は、水面に浮いたまま行われ、生まれ出ようとする赤ちゃんをお母さんラッコは、前肢で抱きかかえるようにして、自分のお腹の上にのせました。生まれたばかりの赤ちゃんは、全身がぬれているため、お母さんラッコは大急ぎで赤ちゃんのグルーミング（毛づくろい）を始め、寒さから赤ちゃんを守りながらお腹の上でお乳も与えていました。この赤ちゃんラッコは4月25日の体重測定では10.1kgと生まれた時の約5倍の重さとなり、雌であることもわかりました。そして愛称を一般公募した結果、父親ラッピィと母親クリンの"ク"と"ラ"をとり「クララ」と名付けられました。このクララちゃん最近では、お母さんから離れて遊ぶことも見られるようになりました。これからどんなおてんばぶりを発揮するのか、成長を見守ってゆくのが楽しみです。（桐畑）

▲只今、授乳中

▲お母さんの腹の上で睡眠中

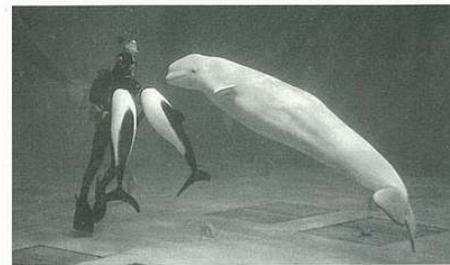
イロワケイルカとベルーガの同居展示

▲いっしょに泳ぐベルーガ *Delphinapterus leucas* とイロワケイルカ *Cephalorhynchus commersonii*

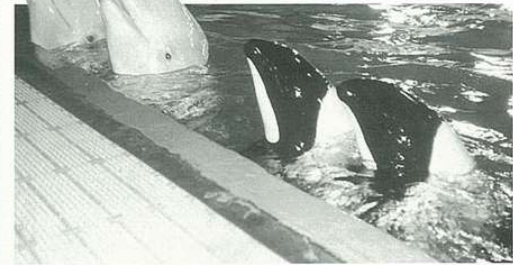
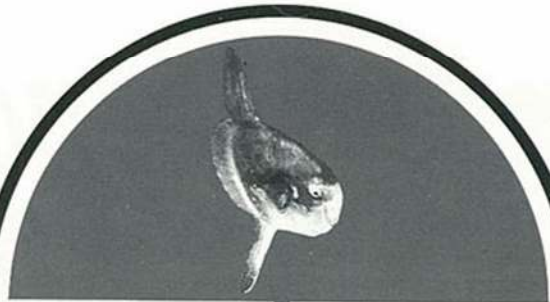
ベルーガの飼育が行われているマリンシアターに新しい仲間、2頭のイロワケイルカが加わりました。ベルーガは北半球の北極海、イロワケイルカは南半球のマゼラン海峡に分布し自然海では決して出会うことのない2種類ですが、冷たい海に棲むという共通点からこのめずらしい同居展示が実現したのです。

この2種類のイルカは生息環境や体の大きさの違いの他に、おっとりとした性格で優雅に泳ぐベルーガに対しイロワケイルカは、小さいながらも気が強く、ダイバーが水中に潜った時マスクの視野から消えて見失いそうになる程、敏速に泳ぎ回るなど行動的にも性格的にも対照的な違いが見られます。

その様な彼等を同一プールで飼育する試みは慎重に行われました。まず別々のプールで飼育し、プール間にある柵ごしにお見合いを十分にさせた後、徐々に同居する時間を長くしていき、約1週間後に同じプールで飼育出来るようになりました。

このようにそれぞれ異なった特徴を持ったベルーガとイロワケイルカですから、近い将来それぞれの特徴を生かし、2種類のイルカ達が力を合わせて演技を行い、素晴しいショーを皆様にご覧頂けることを期待しています。（法花）

▲仲良く食事

▲ベルーガ（左）、イロワケイルカ（右）

モラモラ

●第5回研究集会開催

今年で5回目をかぞえる国際海洋生物研究所の研究集会が、2月6日から8日までの3日間、鴨川青年の家において開催されました。今回の研究集会は、各国研究者と国連機関をネットワークした、海洋汚染に関する国際シンポジウム（ISMAP）を、国際生研の第5回研究集会として開催することとなり、13カ国から154名にも及ぶ参加者が集まり、これまでで一番大きな規模となりました。

研究集会では活発な討議がくり広げられ、あらためて海洋環境と海産ほ乳類の汚染への関心の高さを知らされる集会となりました。

鴨川からこのような国際的話題の情報が世界へ向けて発信されたことは、今後の国際海洋生物研究所の発展のために大変意義深いことでした。

（勝俣浩）

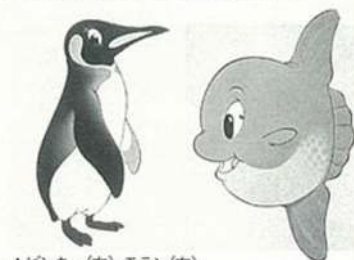
●グラウンドサンクスデー実施

地元の方々には、日頃大変お世話になっていますが意外と当所を訪れる機会が少ないようですので、1月14日にラッコの赤ちゃんが誕生したことを記念し、ラッコはもとより園内をよくご覧いただき最新の「鴨川シーワールド」を知っていただくことを目的として、2月11日（木）に「グラウンドサンクスデー」が実施されました。毎年6月15日千葉県民の日、9月15日敬老の日に御招待の日を設けてまいりましたが、今回は、御宿から館山までの地元の方々をお招きしました。当日は、6647名もの方達においでいただき、予想以上の盛況でした。ラッコプールの前も大勢の方達でにぎわい好評のうちに1日を終りました。

（石川）

●新しいキャラクターデビュー

1990年に鴨川シーワールドがオープン20周年を迎えた記念に、シャチの「オルタン」がシンボルマークとして誕生して以来、ベルーガの「シルキー」、セイウチの「ロッキー」と次々に新しいキャラクターが登場しました。さらに今回、当館の魚類の中では欠かす事が出来ない人気者のマンボウをモチーフにした「モラン」と南極に生息し、ペンギン界の王様で気品あふれるオウサマペンギンをモチーフにした「ピンキー」がデビューし、5種類のキャラクターが全て勢揃いしました。既に5種類が勢揃いした図柄で売店商品やノベルティー等に登場していますが、今後は個々の特性を生かした幅広い活動を行い、当館の人気動物に負けないスターとなってくれることを期待しています。

（満冨小）

▲ピンキー(左)、モラン(右)

●第12回全国豊かな海づくり大会への出展協力

昨年11月8日、勝浦市の守谷海岸で天皇・皇后両陛下をお迎えし、「育てよう生命（いのち）のふるさと青い海」をテーマとした第12回全国豊かな海づくり大会が開催されました。当館では千葉県の出展協力依頼を受け、「ミニ水族館」の設置と展示管理運営を行い大会成功への一助の役目を果しました。この「ミニ水族館」ではイワシの群泳を大型水槽で展示し、その他にクマノミとサンゴイソギンチャクの共生やチョウチョウウオなどのサンゴ礁魚類、ゴンズイ・ハオコゼなどの毒をもつ魚、ヒメコウイカ・サラサエビなど南房総の磯で見られる小さな生き物たちを展示しました。そして来場された人々に黒潮の影響を強く受ける南房総の自然と豊かな生物を紹介できたことを喜んでいます。

（森）